

日本刀はなぜ彎曲したか

彎刀の起源と日本の刀術 — 香取神道流からの一考察

町田市 菅原鉄孝 (香取神道流武術教師)

一、まえがき

日本の出土刀を調査した石井昌国氏によると、日本では古墳時代前期頃から剣と平造直刀が使われていましたが、古墳時代後期から奈良時代にかけて鋒両刃造直刀や鑄造り直

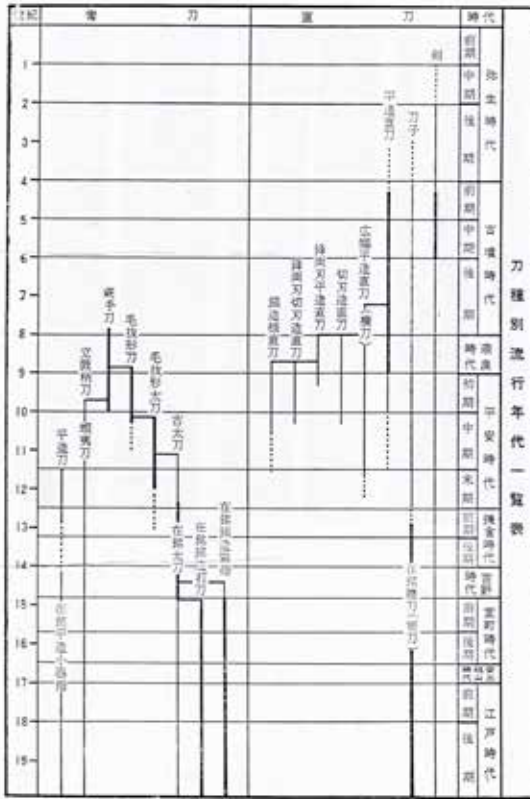
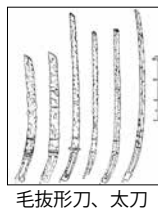


図1. 石井昌国著『薙手刀』134頁より抜粋



毛抜形刀、太刀

刀などに發展します。剣より遅れて發生した彎刀系の薙手刀が古墳時代後期(七世紀末)に出現すると、やがて彎刀系の毛抜形刀や太刀が主流になっていき、平安中期頃に鑄造日本刀が完成したと考えられています(図1参照)。剣の發展は殆ど日本ではみられていません。

石井昌国氏のこの研究論文は『薙手刀』(注1)にまとめられていますので、そちらを参照してください。

本稿は、その『薙手刀』論文を前提としており、その目的は世界的な視野から彎刀がどのように普及したかの理由を考察することにあります。

日本の武道流派の刀術(劍術)を見ると、日本刀が完成した平安中期から鎌倉時代にかけて彎曲を応用した太刀術が出来上がり、その太刀術が基本になって型(中国名では套路)が組み立てられるようになっていきます。この様になった歴史的な背景や武術を、香取神道流の武術とその歴史から考察してみたいと思います。

香取神道流（以下「香取」）を取り上げる理由は、この流派から派生した流派が非常に多く、中世武術の重要な源流となっているからです。この流派にはいまだに多数の技が正確に伝承され、他流派に伝えられた武術はその技の一部にすぎません。しかし、一つ一つの技には名称がないので伝承が難しく、全技術は香取神道流だけが保有しています。しかし、その継承も時代とともに難しくなってきましたので、ここで写真を少し使い、基本的な知識と彎刀の使い方を明らかにしておきたいと思えます。型についての紹介は致しません。長過ぎるからです。

一言お断りしておきますが、本稿は国内の彎刀だけを対象にするのではなく、世界の歴史の中で日本刀がなぜ彎曲化したか、その理由を考察するのが最終目的であって、香取神道流や筆者個人の宣伝が目的ではありません。是非ともご理解いただきたいと思えます。

一、彎曲した理由について

「日本刀は折れず、曲がらず、よく切れる」と言われますが、日本刀が彎曲を強めた理由はよく切れるようにするためではなく、刃や刀身の損傷を防ぐために片側を刃から棟に換え、棟の反りで敵の武器を抑えるために彎曲したと断言出来ません。つまり、「彎曲部分（棟）で相手の武器を抑え、刃を傷つけずに即座に反撃できるようにする



写真1. 実戦では攻撃の刃を刃で受け止める事はできません



写真2. 柄当て（水月、顔面）

ため」なのです。更には右手で柄を握り、左手で刀身の棟を押さえて、柄当て（写真2）することも可能です。写真1のように相手の攻撃を刃でがっちり受け止めると、一回で刃に損傷を与えてしまい使い物にならなくなるでしょう。「曲がらず」という点については、

試しに刀身の中央を横から手で抑えると、簡単に曲がってしまいます。それほど弱いものなのです。日本刀は一旦バランスが崩れると使えなくなってしまうます。したがって刃で相手の攻撃を受け止めることはできないと考えるべきなのです。現代の竹刀武道やアニメ映画では刀を壊れないものとして叩き合って受け止めています。実戦ならば刀身が曲がったり、刃がぼろぼろになってしまうことは間違いありません。

武術の型をご覧になると一見受け止めているように見える動作（写真1）も、実は別の意味



写真4. 小手を下から斬りあげ、同時に肝臓を突くことができる



写真3. うける暇があれば、一步踏み込んで頸動脈を斬ることができる

を含んでいます。例えば、一步踏み込んで頸動脈を斬り込む(写真3)、或いは相手の小手を下から斬りあげる(写真4)、といった意味なのです。「受けるひまがあれば斬れる」というのが香取の教えです。

写真4は小手と肝臓を同時に打っています。相手はこの時右手をあげて防ぎ、同時に此方の頸動脈を狙って来ます。もし突いて来たら此方の刀の棟ではね飛ばします。この様に型は次から次へと攻防が続くので一つ一つの技に名称は無く、現代のように一手だけの簡単な技で終りとならないのです。

三、武用刀としての日本刀

日本刀を世界の歴史の中において考察しようとする場合、最初に指摘しておかなければならないことがあります。

それは現代の刀剣鑑賞(鑑定)学において、日本刀を美術品として鑑賞している点です。換言すると、刀剣を美術的観点から評価していると言えます。このようになったのは、戦後GHQ(国連軍)によって刀剣を作ることも使うことも禁止され、やむなく武器ではなく美術刀剣として作ることが合意され、作刀ができるようになったという経緯があるからでしょう。

しかし、単に輝いている日本刀を鑑賞するだけに留まっていると、真の日本刀の歴史が、世界の刀剣の歴史から切り離されてしまうのではないか、との懸念を抱きます。日本刀を武用刀として世界の歴史の中に置いて武術的な面から考察することが必要であり、それには、錆びついた出土品も含めた刀剣学が必須だと考えるのです。

その際特に必要なのは、例え小刀(ナイフ)といえども、一つ一つの使用目的と使い方(武術)があるので、それを研究することが重要であり、その理由は必ずあるはずなのです。日本刀に限らず世界の彎刀が、彎曲化した理由も必ずあり、それを研究することは刀を使う上でとても大切なことだと思います。美術品的思考からいったん切り離し、武用刀として日本刀を考察することを提案したいのです。

そうすることによって、世界の歴史の中に日本刀を置くことができ、世界中の研究者が日本刀を論ずることができるようになるのです。現在の美術鑑賞だけでは、国内や海外の考古学者が参加する余地はないと思われれます。

余談ですが、筆者は今年9月にブダペストで武術指導をする予定ですが、その合間に、日本刀講座をしていただきたい、との依頼を受けました。ハンガリーでは、日本刀のことを知っている人は殆どいないとのことでしたので、今後このような機会が増えることを期待して引き受けることにしました。また見識を広める意味でも当地の考古学者にも参加していただくようお願いしました。

筆者の勉学のためにも、ぜひ成功させたいと思います。その時には、敵手刀や彎曲化した歴史、彎刀を使う武術なども含めたテーマを予定しています。本稿はその一部分をなしています。

したがって、世界の歴史を根底において、それと関連付けながら日本刀が彎曲化した理由を考えたいと思うのです。

その例として、彎刀を使うようになった日本の武術流派の基幹の一つである香取神道流総合武術の太刀術をとりあげ

て説明し、それによって弯刀が形成された理由を少しでも理解していただけるようにしたいと思います。

幸いにも筆者は、日本武道の中興の祖とも称される飯篠長威斎家直公が創始した天真正傳香取神道流（千葉県教育委員会指定の無形文化財。弯刀術）を、50年近く修行してきました。総合武術には甲冑を付けた時の「表之太刀」、甲冑をつけない着流しの「五行之太刀」、「棒術」、「長刀」、「両刀」、「小太刀」、「七条之太刀」、「槍術」などがあります。全ての型が対練形式になっており、弯曲した太刀が中心的に使われています。この他に風水による築城術があり、忍術、手裏剣術などを含んだ総合武術流派が香取神道流なのです。

四、香取神道流の特徴

創始者飯篠長威斎家直公（一三八七～一四八九）は弯刀術が発達した鎌倉時代（一一八五～一三三三）より後世の人です。したがって弯刀術を修得した人から伝授されたと推察されますが、伝承では神変童子から教わったことになっています。神変童子とは山岳修行者、山伏ではないかと考えられます。鎌倉時代の剣術は、殆ど謎に包まれていてよくわかっていません。



図2. 飯篠長威斎家直公

例えば京都の鞍馬山で修業した源義経（牛若丸）（一一五九～一一八九）は、鬼一法眼に就いて修行し超人的な腕前に達したとの言い伝えがありますが、鬼一法眼は義経の他鞍馬の八人の僧兵へ武術を伝えており、これが鞍馬八流、または

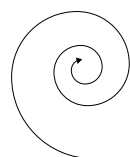


図3. 渦巻紋

京八流と呼ばれていますが確かなことはわかっていません。

鞍馬流ができたのは香取神道流より後で、流祖の大野将監（一五七三～一五九三）は何人について修業し、この刀法を編み出したかは明言されていません。現在残されている型は非常に短かいです。しかし、「巻き落とし」という技がありますので、渦巻き状に弯刀を使う武術が既にあつたことが伺われます。これに比べると、香取神道流の型は、例えば甲冑の型では四つの型に構成されており、型の中の一つ一つの技が連続して非常に長く続くのが特徴です。互いに陰になり陽になつて甲冑の弱点を打ち合うようになっています。

一つの型には、全く異なる弯刀術が、打ち込み側だけでも約十五技が含まれています。このような武術は世界中のどこにも残っていないので、大変貴重な存在と言えます。

五、修験道について

筆者の師であつた大竹利典先生は、筆者が出版を依頼した際、「もう秘伝の時代ではないから武術を公開しよう」ということで承諾され、三冊のシリーズ書を筆者が出版しました。

その時一枚の絵を見せてくれました。それには日本全国の修験者の修行する山が描かれています。一例をあげれば、丹沢山系の山は「相模の



図4. 山岳修験者

国は太郎坊」というように表記されていたのです。ですから修験者についてはよく話題になりました。修験道はいろいろな宗教が混在しています。

天・地・人・空・風・火に加え魔界に落ちた人も救うという宗教感を持っています。この宗教には中国の道教思想（日本では道教とはいわず北向庚申堂）も入っているようです。ですから香取神道流には、風水を使った築城術が残されているのです。真言密教の「九字の印」（インドのムドラー）や悪霊を落とすための真言も習得しなければなりませんでした。しかし、その教えは全て秘伝にしていたのです。

武術の気合（エイ、ヤツ、トーツ）は悪霊を落とす時の気合なのです。修験者が両足で遠くまで飛ぶ「鳥飛び」も、長刀術や棒術に入っています。

インターネットで「修験道」を検索すると、次のような説明が得られました。（<https://ja.wikipedia.org/wiki/修験道>）
「日本に仏教が伝来したのは、欽明天皇の時代の538年であるとされるが、平安時代（794年・1192年）に唐で修行を積み、本場の山岳宗教に触れ帰国した最澄や空海によって天台宗・真言宗が起こされ、比叡山、高野山などが開山される。比叡山（延暦寺）は最澄によって七八八年（延暦七年）に、高野山（金剛峯寺）は空海により八一六年（弘仁七年）にそれぞれ開かれた。それまでの都市に寺院を構える仏教諸宗派が政治との結びつきを強めていたことへの批判的意味合いも含み、鎮護国家を標榜しながらも密教的色彩を強め、政治とは一定の距離を置いた。」

香取神道流にも「宗家は仕官してはならない」という規定

が残されています。

修験者は、技が戦争に利用されることを恐れたのだと思います。

六、作刀していた修験者の秘伝

修験者は作刀もしていましたが、それも当然秘伝でした。作刀方法はいまでは殆ど書籍で知ることができませんが、わからない点はまだ多数残っています。例えば古刀の地鉄にコバルトを入れたことです。（この点は確認が今後必要です。）エジプトのツタンカーメンの短剣には、コバルトとニッケルが含まれていることが最近報道されました（NHK 2018年12月26日午後8時放映『ツタンカーメンの秘宝』）。つまり、この短剣は隕鉄で作られていたのです。しかし、平安、鎌倉湖の古刀にコバルトが入っているのはなぜでしょう。これが一つの謎です。

コバルトを合金すると地鉄が非常に美しくなります。所謂古刀の地鉄なのです。しかし、いまだに再現されていません。コバルトは朝鮮半島でも使われたようですが、日本はそれよりも早い八世紀頃から使われ始め、十世紀〜十一世紀にかけて盛んに使われるようになりました。

しかし、モンゴルタールのフビライが中国の元朝皇帝になつてからシリアからコバルトを輸入し、製陶に使うようになりましたので、どの経路が正しいか、今後の調査が必要となります。

日本でコバルトが使用された予想経路は次のとおりです。

- (1) 日本国内のコバルトを使用した。
- (2) シリア商人が新羅（前57年・935年）に持ちこんで使

われていたものを輸入した。

(3) 元朝時代（一二七二年以降）にシリアから輸入したものが日本の朝廷にもたらされた。元朝と日本の朝廷以外は秘密。

江戸時代に日本刀研磨法が完成したと言われますが、現在行われている研磨の過程で酸化コバルトが塗布されています。いつから始まったのか、これも疑問です。

もう一つの秘伝は杓目の出し方です。

渦巻紋の杓目の出し方です。作刀の時に現在は二つ折りにしていますが、杓目は三つ折りにして、折り目の鑿を斜めに入れて切り、ねじります。これを素延べします。そうすると渦巻きが鎬地や棟に出すことができます。

この方法は、筆者がダマスカス刀鍛冶から教えられた方法です。日本刀の祖ガサン（月山）のルーツはコーカサスにあると考えられます。なぜ渦巻きが必要だったのでしょうか。これが一つの謎です。

七、渦巻紋と武術

この渦巻は自然の力を意味し、武術を行う時は丹田（臍の周り）を回し、そこから力を出します。五行の太刀では、柄を丹田に付けて回し、この丹田を回して繰り出す力を剣先に移動させるのです。非常に高度な技なので、普通の人に教えてもすぐにできる分けではありません。握りが少しでも緩むと丹田の力は剣先に伝わりません。

これを習得すると、剣は猛スピードで動き出します。意識の集中によって、剣先は狙った所に寸分変わらず飛んでいきます。同時に逆複式呼吸法（或いは丹田呼吸法）の力も必

要になります。

槍術や長刀も丹田に付けて回します。

図5は、武漢体育大学教授張克儉老師（故人）が筆者に允可してくれた槍術の極意です。彼はシルクロード近くの西域武術の達人で、82種類の武術を習得し、2000人の騎馬兵を統率していた人です。武漢体育大学に乞われて大学教授になりました。

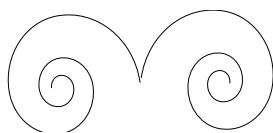


図5：槍術の極意「渦巻紋」
(武漢体育大学張克儉老師允可)

流武術の渦巻状の動きは、中国武術と根底において共通していることが分かったのです。

武術は、(1) 意念による意識の集中法（調心）、(2) 呼吸法（調息）、(3) 姿勢法（調身）が三位一体になって出来上がっていますが、これは宗教と共通しています。図6で示しておきます。

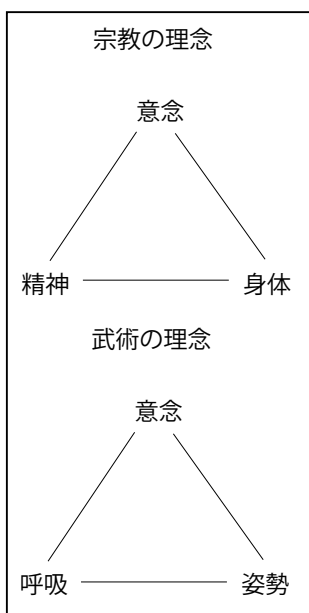


図6：宗教と武術の理念

健全な体が必要と考えて武術を教えるようになったのが中国

インドの達人が中国で仏教を広めるために、まず強



写真5. 直剣と太刀を合わせたイメージ

歴史的に重要な点は、両刃の直剣時代から片刃の彎刀時代へ移行した理由です。何故彎刀が考案され、使われる様になったのかを考えると、直剣に対する彎刀のメリットがあつたからと考えることができます。そう考えると、当然、武術的要素を加味し、それを含めた考察が必要となります。日本刀は両手で握っていますが、いつから両手になったのかなども学問的に興味深く、握り方も伝統武道と現代武道では全く異なり、フットワーク（運足法）は太極拳のように一歩一歩に意識を置いて歩くように足を運びます。これを「一足一刀」

武術の始まりです。ですから武術と宗教は一体となり、その流れの中において彎刀術が訓練されたと考えることができます。

この香取神道流の彎刀武術は、世界のどこの国が起源なのでしょう。インド、中国、チベット、蒙古タール、それとも日本で開始されたのでしょうか、いずれも疑問が残ります。

八、彎刀術の由来

「日本刀が彎曲している理由を何処に求めるか」を考えた場合、最初に彎刀を作った国は何処か、いつ、どのように作られたのか、誰が、どのように使ったか、など考察すべき点が明確になってきます。日本刀が日本国内で完成したことは間違いないのですが、その起源と彎刀術が必ずしも日本で考え出されたとは限りません。

といえます。後ほど写真で紹介したいと思います。更に中国武術の基本概念「調心・調息・調身」理論や歩型（馬歩、弓歩、虚歩、丁歩、厥歩）や、「陰陽五行思想」によって武術の型（套路）が組み立てられています。剣術も単に戦いの道具ではなく、戦わずに戦争を終わらせることの必要性を説いているのです。

このような点を考慮すると、一人の日本人によって創始することは不可能であつたと思わざるを得ません。

十六世紀以降に引用されたと推定しますが、香取神道流の教師免許の要件として周代の道教の師、黄石公の兵法三略の名称も引用されています。兵法三略の冒頭には「柔能く剛を制す」の精神が説かれています。日本の現代柔道の基本理念にもなっています。

ですから日本の彎刀術は、元代の中国から宗教者（真言密教）によって移入され、中国で発達した高度な彎刀術や兵法理論が次々と日本に入ってきて来て、修験者によって修行されていたが、日本刀が完成された段階で彎刀武術が日本で完成したのではないかと筆者は考えます。

この発達した武術は、東洋思想の「調和の精神」として完成されていることが非常に重要な点です。それは試合中心の西洋思想ではないからです。

中国武術はインド人達磨大師によって開始されました。達磨大師は、壁の一点を見つめる意識の集中法（面壁八年）で有名です。筆者も意識の集中法として、両手の指を使って目の運動を行っています。「目は志（精神）の窓」、「志は気の師なり」（孟子）だからです。目からほとばしる相手の気

を読む事で、何処をねらってくるか、その精神を読み取ることが出来ます。それにより眼力がしだいに強くなってきます。

九、弯刀の歴史―世界に影響を与えたタタール

2018年6月にロシア領コーカサスのスタブロポリ市を訪れた際、最近できた映像だけのロシア歴史博物館に招待



写真6. 左からスタブロポリ市・ロシア歴史博物館セルゲイ館長、筆者、館員（筆者の携帯カメラで撮影）

されました。セルゲイ館長が迎えただけで、各時代に分けられた一つ一つの小間を回って映像を詳細に説明してくださいました。特に興味深かったのは、「モンゴル帝国の戦闘軍団タタールの影響によって世界的に弯刀が使われるようになった」という話でした。

タタールは1382年にロシア



写真7：一騎打ちを行う兵士（ロシア歴史博物館、筆者撮影）

ア軍と戦いロシアを制圧しました。この時、戦闘開始は一騎打ちで始まりました。一人のモンク（仏教徒アレクサンドル・ペレスベト（Alex

andr Peresvet）が甲冑をつけずに出てきました。よほど腕に自信があったのででしょう。ロシア軍からも最も力強い兵士が選ばれました。ロシア側の兵士の名前はチェルベイ（Chelubei）です。

二人は両軍の前で激しく戦いました。その結果ロシア側の兵士がタタールのモンクを力で制圧し殺すと、タタールの全軍が一斉攻撃を開始し、ロシア軍の代表兵士を殺し、ロシア全軍を制圧してしまいました。ロシアは2世紀以上にわたってタタールの支配を受け、その結果、ロシアとタタールは互いに文化を共有するようになったということでした。これはセルゲイ館長からの話ですが、この戦いを「Battle of Kurikovo」とよんで、今でも語り草になっています。

しかし、この戦いによって一気にロシアの直剣が弯曲化したわけではなく、10世紀頃から12世紀にかけて次第に弯刀化していったのです。一騎打ちはこれ以前にもあったようです。

コーカサスのスタブロポリ市はヨーロッパに通ずるシルクロード上にある町で、東洋と西洋の中間地点に存在しています。



図7：蒙古古代鉄兵（周章著『中国兵器史稿』）（注2）

す。タタールは草原ルートを通り東ローマ帝国のブルガリア、サン朝ペルシャ、チュ

ルク(旧トルコ)、ロシア、チベット、大理国、中国などと戦ったことによる影響で、それらの国で弯刀が作られるようになったと考えられます。有名な青龍刀もタタールの影響と筆者は考えています(図7参照)。

第5代フビライ・ハンが首都を大都(現在の北京)に築いた蒙古帝国タタールは、国名を「元」(1271)に変えました。そうして日本に目を向けたのです。元は属国の高麗軍と共に日本を襲撃しました。いわゆる元寇の役(一二七四、一二八一)です。

これを防備するために、日本は鎌倉の北条時宗が先頭にあつて指揮をとりました。

このような歴史を観ると、武士が台頭して先頭に経たなければならなかった鎌倉時代の意味が理解されます。

十、フン族と兄弟だったタタール

近年、興味深い話を幾つか耳にしました。一つはスタプロポルで日本刀が出土したということ。もう一つは、大きな古墳がフン族(ハンガリー人アチラ大王)を埋葬したものであったことです。なぜ日本刀がスタプロポル市で出土し、なぜハンガリーのフン族の墓があるのか、私には驚きでした。

ハンガリーのブダペストに行った折、筆写は門人に次のように話しました。「私が教えている香取神道流武術は、多分タタールの仏教徒が伝授したものに相違ない」と。そうすると門人たちは嬉しそうに話しました。「タタールとフンは兄弟なのです」。しかし、フン族の刀剣を調べると棟寄りに彎曲していないのです。これも私には不思議に思われました。

そこで次のセミナーのためにブルガリアの首都ソフィアに

行ったとき、門人のテオナルド氏(ソフィア大学教授、エジプト考古学)にこの疑問をぶつけてみました。彼はヨーロッパの歴史に詳しいと聞いていたからです。

彼は言いました。「フンは弓を使うからです。フンは裸馬に二人が乗り、一人は御者、もう一人は騎射で、一分間に60本の矢を射ることができました。日本の弓とは違います。それから鎧(あぶみ)を考案しました」。

なぜ、タタールと兄弟なのか、という疑問に対しては、「お互いに戦争が起きた時には助け合う、という協定を結んでいたからです」。

なぜ協定を結んだのかしつこく尋ねると、「タタール軍に協力しなければ殺されるからです」「タタール軍は大きな一つの軍団ではなく、多数の部族集団で、戦争の時だけ集まって一致団結しました。フン族も一つの部族なのです。タタールは、通常はただの放牧民族なのです」と。

草原ルートを東西に駆け巡ったタタールはヨーロッパでは東ローマ帝国の属国ブルガリアを襲撃。ササン朝ペルシャ、そして旧トルコ(チュルク、チュルキー)を襲撃しました。この時フン族も加わっていたかもしれません。チュルキーもシベリヤに進出し宿敵と戦いました。

十一、チュルキーの刀剣とロシアの刀剣

この時、両刃の片手持ちの直剣に対し、タタールは片刃の弯刀を使ったのだと推測します。しかし、弯刀だけとは限りません。ヨーロッパでは第二次世界大戦でも直刀、直剣、弯刀すべてを使いました。

その結果、ペルシャ、トルコも弯刀を作るようになりまし



写真8：チュルキーのジェレミーと筆者（左）

5年ほど前ですが、筆者はロシアのサンクトペテルブルクで一人のチュルキー（シャーマンの家系）にインタビュする機会を得ました。彼の名前はジェレミー。タタールに対する憎しみが今でも非常に強く感じられました。

彼の話では、タタールはチュルキーの村を襲い皆殺しにした挙句、赤ん坊を谷底に落として女性を奪い去ったそうです。更にチュルキーに

十二、粗悪なタタール刀

タタールが使ったものと思われませんが、日本で作られた可能性も否定できません。いずれにしても日本もタタールの影響を受けて、蔵手刀時代から徐々に彎曲を強め、彎刀武術と一体になって発達したと考えられるのです。

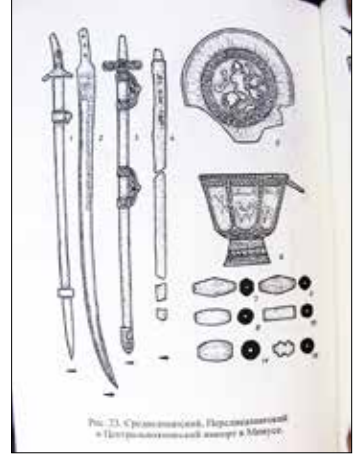


図8：ジェレミーが見せてくれたチュルキーの刀剣の図、10世紀から12世紀にかけて次第に彎曲したチュルキー（ロシア）の彎刀。

た。ロシアやペルシャなど東西ヨーロッパ諸国やアジアでも彎刀を作りました。ですから、ロシアで発掘された日本刀は、

武器を作ることを命じました。従わない場合は殺すだけです。やむなくチュルキーは武器を作りましたが、密かに一年で壊れるように作ったそうです。タタールの武器は粗製乱造でしたが、チュルキーの刀剣はしっかりしていたからです。



図9. 蒙古元代(?) 鉄兵 (周韋著『中国兵器史稿』より (注2))

です。

ところで図9の右側のタタールの彎刀ですが、これは日本の古墳時代後期の蔵手刀と類似しています(図10)。つまり、元代(一二七一〜一三六八)

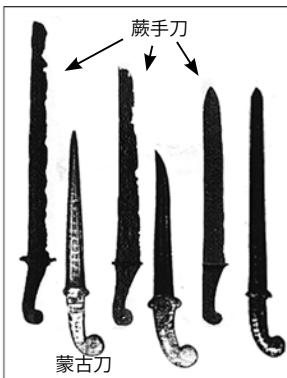


図10：柄が棟(左)側に反っている蔵手刀、柄が刃(右)側に反っている蒙古刀(3振)

筆者の考えでは、逆に粗悪品の刀剣だったからこそ、折れないように、曲がらないように、相手の攻撃力を弱める武術を考案し、その為片刃の彎刀を考案したのだと思います。よく斬れるようにするために彎曲化した、という説明は第一義ではないのです。試し切りを行う先生の話では、直刀のほうがよく切れるそう

のタタールの刀剣ではなく300年以上前のものと推定されます。著者も元代(?)というふうには不確かな点を示しています。この刀剣は明代にもつづきます(写真9参照)。



写真10：蕨手刀風の長刀(韓国の博物館で筆者は撮影)注3

この彎刀と蕨手刀を抜き出して比較してみたのが図10です。柄の握り方が異なっていますが、



写真9：明代の馬刀(北海道・妻沼浩二コレクション)

刀身はかなり類似しています。蕨手刀は、長柄をつけて長刀として使用するために、柄を棟側に反らせたのでしょうか。蕨状の部分は目釘穴を撃つ為だった可能性が有ります。朝鮮半島でも同様に使われたようです(写真10参照)。

十三、チベット仏教を取り入れたタタール

筆者は三〇年ほど前に北京で万里の長城に行った後に長安に行き、長安駅から列車でシルクロードを旅行したことがあります。ゆっくりした列車で、五三数時かけて砂漠を走りました。途中で雪が降ったり、熱くなったり、天候が目まぐるしく変わります。一日間走ったところでしようか、嘉峪関を過ぎると、崩れかかった万里の長城が点在し、最後は消滅しました。ここまで蒙古タタールを恐れて城壁を作ったことに驚かされました。

北方民族の襲撃を防ぐために莫大な費用と労力をかけて、秦始皇帝が万里の長城を作らせたのです。

列車を下り、バスで敦煌に行きました。莫高窟があり仏教の壁画が多数ありました。仏教を伝えた三蔵法師(玄奘三蔵)が通った道もたどってみました。キジル千仏洞(キジル石窟寺院)も訪れました。火炎山も見えました。

このシルクロードを横切るように、蒙古からチベットへ通ずる敦煌經由の道があります。

タタールはチベットを襲撃し制圧しましたが、チベット仏教を国の宗教として取り入れました。

戦いに明け暮れた生活に終止符を打って平和な生活に戻りたかったのかもしれない。徐々に北京の大都から離れ、放牧地へと戻って行ってしまったのです。そこへ他民族が侵入して制圧し、明代(一三六八)が樹立されました。

十四、日本に伝わった製陶の秘伝

チベット仏教が日本に伝わり、真言密教と称されるようになり、日本の刀剣や武術にも多大な影響を与えました。真言密教は山岳宗教として日本各地の山々で修行されましたが、その彎刀術は秘伝とされ、親兄弟といえども見せたりはしなかったのです。宗教者(山伏)は刀を作りましたが、それも秘伝でした。

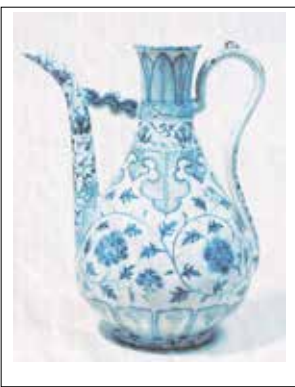


写真11：青花牡丹唐草文水注
景德鎮・官窯(注3)

密教が入ってきた頃の作刀は、街道筋で区分けされるのではなく、修験者の山と山を結ぶ線と考えられ、後代になつて街道筋で鍛冶の系統を認識するように

異国の香りはどこから

「青花牡丹唐草文水注」

景德鎮官窯

白地に藍青色の絵模様が見える。形も整っていて、気品に満ちた水注だ。14世紀後半、中国・明の初代皇帝の時代に、景德鎮の官窯で作られたという。皇帝の宝を受け継いだ北京の故宮博物院にもほぼ同じ形のものがあるといわれ、この水注も特別に作られたものだったに違いない。

後の日本で「染付」と呼ぶようになった白地に青の磁器のことを中国では「青花」という。モンゴル人が興した元の時代に作られるようになり、明の時代に洗練された。景德鎮には明の官窯が置かれ、同所は青花の隆盛と共に窯業の中心地となった。

この水注にどこか異国の趣があるのは、青花がイスラム圏との交流によって生み出されたからだ。焼成で藍青色に変わるコバルト顔料は西アジアからの輸入品。唐草模様も元をたどればシルクロードを通じて伝わったものだ。

イスラム圏の影響は形にも顕著だ。把手は耳の形に似たカーブを描き、細長い注口も緩やかに曲

る。曲面が多いのは、銀などの金属製だったイスラム圏の水注を磁器で作っていたためだ。磁器の注口と頸をつなぐ鑿形の板は、元々は軟らかい金属製の注口を支えるためのものだった。

青花の名品は宮廷で使われるだけでなく、イスラムの盟主にも贈られた。素材を変えても形を受け継いだ水注は、東西のアジアをつなぐ架け橋ともされる。

(西田健作)

▽「染付」世界に花咲く青のうつわ一展は3月24日まで、東京・丸の内の出光美術館（ハローダイヤル03・5777・8600）。

巨福休館



美の履歴書 587

- ・名前 青花牡丹唐草文水注
- ・生年 明・洪武時代（14世紀後半）
- ・体格 高さ33.0cm
- ・素材 磁器
- ・生みの親 中国・景德鎮官窯
- ・親の経歴 景德鎮は中国江西省にあり、近郊で高嶺土（カオリン）が採れることなどから磁器の産地として栄えた。明の時代には官窯が設置され、中国最大の窯業地に発展。明～清の時代には多くの青花を輸出した。
- ・日本にいる兄弟姉妹 東京国立博物館に元時代からの青花の優品があり、出光美術館には今作とほぼ同形で模様が赤色の水注がある。



1 把手の上には、留め具を付けるための穴がある。元々は蓋があったと推察できる。

2 「青花」では、コバルト顔料で絵を描いた後にガラス質の透明釉をかけてさらに焼くことで、藍青色がつかややかに見えるようになる。

3 中央には牡丹の唐草模様が描かれている。元時代には空間を模様で埋めていたが、明時代には次第に余白をいかにすようになった。この水注はその過渡期。

なりました。

蒙古帝国タタールが「元」に改名されると、元朝皇帝は中東シリアと交易しコバルトを輸入し、それまでの白磁・青磁の淡い色から青色の強いコバルトブルーを使うようになりました。コバルトは顔料として使われ、その上に釉薬をかけて加熱すると色がでできます。日本に入ってきたコバルトの水注の写真を掲載しておきます。朝日新聞が報道したものです（前頁参照、写真11）。



写真 13. コバルトを使った陶器（台湾故宮博物院で筆者撮影）（注5）

コバルトを製陶に使うことは秘伝とされ、官窯だけが作るこゝとが許され、民窯で作ることは禁じられました。それで官窯の景德鎮などが中国では有名になりました。この秘伝は明代末まで続きましたが、やがて民窯でも自由に使われるようになりま

した（写真13）。

コバルトを製陶に使うという秘伝を最初に公開したのはドイツでした。それで日本も公開せざるを得なくなったのだそうです。

十五、日本と韓国のコバルト

製陶窯メーカーの（株）シンリユウ代表取締役小澤忠氏によると、コバルトが日本で使われたのは八世紀ころからで、最も顔料として使われたのは十〜十一世紀ころだそうです。もちろん民間では使用禁止の秘伝でした。丁度、日本の古刀が作られたころです。しかし、八世紀は元



写真 14. 朝鮮刀『御刀』（韓国中央博物館で筆者撮影）（注4）

代（二二七〜一三六八）よりも早いことになり、一つ疑問点が残ることになります。

コバルトは韓国でも朝鮮時代（一三九二〜一九八七）に刀剣に使われました。ここに掲載する朝鮮刀『御刀』（写真14）は実際に拝見すると、コバルトが使われていると気づかれます。

この写真は筆者が二〇一七年十月にソウルを訪問した時に、韓国中央博物館で撮影したものです。しかし、まだ、コバルトを確認できていません。学芸員に問い合わせても不明だそうです。でもこの色はコバルトに相違ありません。

十六、古刀の秘密

筆者は、「古刀」と称される日本刀にコバルトが使われた可能性があると考えています。そのような刀剣を造ったのは、コバルトを使える身分の高い朝廷に仕えた鍛冶だと推定されま瀬戸市（陶器は10世紀開始）、多治見市、瑞

浪市などでは道路上の石に付着しているコバルトが採取できましたので、それが民間でも使われたり、製鉄の原料鉱石の中に自然に入ったりした可能性も否定できません。

古刀の地鉄の色は、重量比0.01%ぐらいの割合でコバルトが含まれていると思われまゝ。それを証明するため



写真 15. コバルトを使用した陶器（台湾故宮博物院で筆者撮影）注5

に、筆者は実験の準備をしているところです。1%〜2%含めると刀剣は真っ青になってしまいます。そのような陶器が写真15です。

コバルトは粘度が高いので、折り返し鍛練の鍛着剤としても使えます。その場合、コバルトだけなのか藁灰に混ぜて使ったのか、実験が必要です。

卸金法で炭素を調節する際に酸化コバルトを混入し、合金させた可能性も考えられます。上塗りの場合は、製陶窯で陶器と一緒に加熱したのかもしれない。

日本刀にコバルトを使うという考えは、今も日本国内では皆無です。筆者は、2018年8月号の『秘伝』という雑誌に、埴埴の中に品位の高い鉄鉱石を入れて製錬する（トルコで5世紀に使われた）方法を応用し、コバルトを入れて一六〇〇度で加熱して合金する方法についての論文を書きました。興味のある方はぜひご覧ください。

十七、太刀から打刀へ移行した理由について

反りの強い太刀（ロシアではサブレ）から打刀（新刀期）（ロシアではシャシュカ）へ移行した理由は、十六世紀初頭に軽騎兵コザックが台頭し、抜き打ちを開始したからです。



写真16. コザックのシャシュカ



写真17. 右サブレ（太刀）からシャシュカ（左）への移行（注6）

彼らはポーランドや各地の旧道と言われる場所から集まってウクライナに集結し、ザポロウ

シュウエイ・コザックと呼ばれるようになり、その一部がコーカサス方面のロストフ・ドン市に移動し、ドン・コザックと呼ばれるようになりました。さらにロシアの中核に移動し、今でもロシア政府のために忠誠を誓って働いています。彼らは主人に忠誠を誓う武士道を持っています。

この武士道はローマ帝国時代に発生し、各地に伝わり、中国にも移入され日本に伝わったようです。中国の中華思想もローマ帝国に由来していると思われまます。

それまでのサブレ（太刀）は、鞘から抜く動作、打ち込む動作の二つが必要だったのですが、それでは一手遅れてしまいます。それでコザックは反りを浅くし、抜き打ちを可能にしたのです。この流行は日本でもいち早く取り入れられました。

ロシアでシャシュカの使い方を拝見しましたが、殆どが抜き打ちで、リングを空中に投げ上げて二度切る練習をしていました。サブレはマントを脱ぐ動作に合わせて抜きつけます。香取神道流のような連続した技はもう見られませんでした。

十八、香取の弯刀術

基本知識

弯刀の握り方…把法（環頭大
刀の如く）

左手の掌で柄頭を包み込むように握ります（写真18）。指を伸ばさず全部の指で柄を握ります。右手は左手から半握り離して鐔



写真18. 握り方：把法



写真 19. 刺す時に柄推しできる

近くを握ります。両手を離さぬようにします。両手共に親指と中指を接するように握ります。口伝では「握り卵の手の内」といいます。鏢に親指を付けると爪をはがすことがありますが、注意が必要です。右手の位置は広くならないように、型の始めに一本づつ頭に付けて確認します。右手が前に出すぎると、相手に届かなくなります。

巻打ち

冠付きの甲冑を着用した場合に必要な撃ち込み方法です。



写真 20. 巻打ちの要領



写真 21. 巻打ち (前から)

右手を中心にして、柄頭を握った左手

で押し下げるようにして右手の甲を額につけます。刀を振りかぶった状態になります。

その状態から左手を引き付け、右手で鋒を攻撃部位に向けて意識を集中して送りこみ、打ちます。

振りかぶる時も打ちこむ時も相手の目を見ることが大切です。

観見二つのこと

肉眼で相手の眼を見ることを「見」といいますが、肉眼は別の所を見て(遠くの山など)、心で相手の志(意念)をよ

むことを「観」といいます。これを心眼とも言います。心眼には第三の目(眉間)を使う場合が有ります。

例えば、軽く眼を閉じて肉眼は相手の手元におき、心で相手の志(意念)を読みます(七条の太刀)。



写真 22. 目付

このようにすると、こちらの意念を読みとられずに、相手を観察できます。通常は剣尖から相手の目を見たまま練習します。これを「目付」と言います(写真 22 参照)。

巻打ちの時の呼吸法・逆腹式呼吸法(瞬発力)

起勢と収勢

初心者は刀をふりかぶる(鋒を上げる)時に息を吸いますが、息を吸う時間に相手に打ち込まれてしまいます。動き出す(振りかぶる)前に息を吸っておきます。起勢が必要です。息を吸う時に腹を引きしめる呼吸を「逆腹式呼吸法」と云います。肺が膨らみます。吐き出す時も引き締めます。

起勢・動作を始める前に一旦息を吸いこんで丹田に力を貯えておくことを「起勢」といいます。吸いこんだ息を吐き出す力で鋒をあげ、打ち下ろします(二つの動作を一つにする)。撃つたらずぐに自然に息を吸い込みます。ですから速い連続技が出来るのです。打つまでの小さな呼吸(丹田の力をぬかずに行う)調節は自由です。全ての動作はこのような逆腹式呼吸法と起勢が必要です。

空中に飛び上がって二度打つ、三度打つ巻打ちの修行をします。いわゆる天狗飛び斬りの術です。天狗とは修験者ですが、もともとの意味は空中に跳びあがって遊ぶ犬のことです。型をはじめるときに起勢し、緩めずにそのまま続けます。型が終了したら丹田の力を自然にもどします。これを収勢といっています。

剣に脈を通す（気剣体を一致させる）

どの構えの時でも、丹田と剣尖を気で結び、緩めずにいつでも打ち込めるように準備します。こうすると剣尖に脈が通じ小さな動きが出てきます。剣が生きている状態です。握り

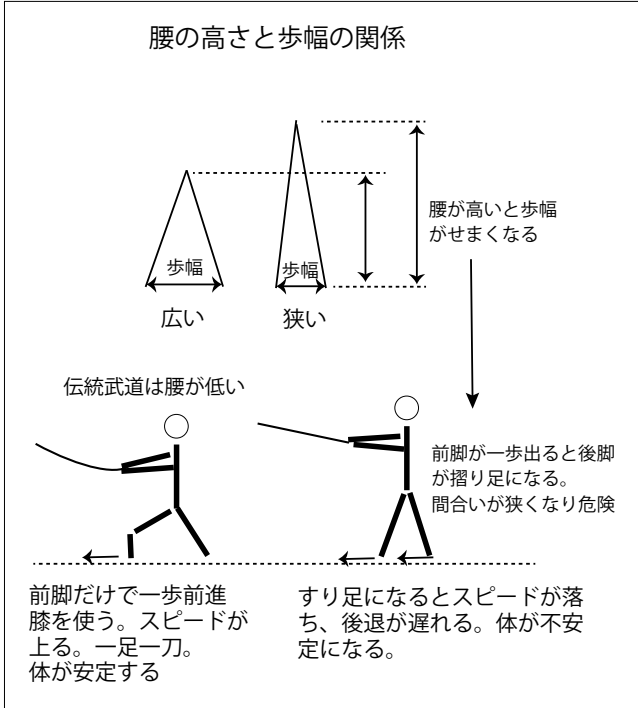


図 11. 腰の高さと歩幅、間合、摺り足の関係図

がゆるいと脈は打ちません。握りを強目にして、手首、肘、肩関節は緩めます。身体を中心に一本の筋が通るのを感じます。

一足一刀（中腰で歩幅を広くする）

姿勢が高いと腰の位置が高くなるので、歩幅は狭くなります。この状態で右脚を一步踏みこむと、左脚が摺り足で自然に行ってしまう。この摺り足は全体の動作が遅くします。攻撃的にはメリットが有りますが、戻ることが遅くなります。

姿勢を低くして歩幅を広くすると、右脚一步の歩幅だけでも相手に届きます。これで一刀を使うことができます。三角形を頭に入れて見ると分かりやすい。ピラミッドの姿勢です。歩幅を広くして、重心を低くします。打った後も腰を低く保ちます（図11）。

陰の構え（写真23）

剣尖を上に向け右手を右耳の高さに上げ、刃を相手に向けた状態で構え（心構え）ます。剣尖と丹田を結んで脈を通します。「体中剣有り」の口伝があります。己の姿勢を剣と正しく並行させ、身体



写真 23. 陰の構え

の中心に筋を通します。

撃つ時は「気剣体一致」にします。初心者は打つ前後に剣にゆるみが生じます。例えば気が先に走り、次に身体と脚が出て、それ

から剣が前に出ます。ばらばらの状態です。この三点を一致させるのです。殆どの人は剣尖を後方に下げてから前にだします。これを正すのは容易ではありません。

下段の構え（陽の下段、陰の下段）



写真 24. 下段

陰の下段：棟を上にして
剣尖を下ろし、相手と自分の
中心線上におきます。剣
に脈を通します。

陽の下段：刃を上に向け
た下段です。

逆下段：左脚を前にした下段を「逆下段」と言います。

香取では、打った後に直ぐに下段を取ります。相手の反撃を予想して下から突く準備です。下段は休む意味ではありません。

間合いと位（剣先の目付の高さ）

表の太刀ではお互いに目に剣尖を触れあった状態で間合いをきめます。五行の間合いは水月に剣尖の位をとるので、間合は狭くなります。

香取の間合いは「間合いの妙」といわれ、相手の太刀が届かないのに此方の太刀が届く間合いを取ります。一足一刀の時だけ有効です（図13参照）。

烏飛び

両脚を地面につけた状態から斜にとび下がったり、斜めに前方にとびます。弾みをつけて飛びます。

忍術では体を斜めにして走る口伝が残されています。走っ

て疲れたら、地面に穴を掘って体を中にいれ、大地の気を吸収して回復させます。

大上段はとるな

両手を頭上から離して高く上げる大上段の構えは、香取にはありません。「上段は冗談にもとるな」です。

最初の起勢で上段をとる場合が有りますが、必ず両手の拳

と柄の3点を頭につけます。三点を頭につけて柄の握り箇所を確認してから打ち込む必要性からです。上段を取ると、相手が小手と横面を同時に狙うからです。

弯刀のメリット

(1) 棟を使う技

相手の刀剣を渦巻き状に巻き落とす、棟で引つかけるように跳ね上げる、手許を押さえる、など多数あります。

(2) 棟に手を添える事ができる

刀の棟に手を添える事ができます。止むを得ずうける場合、当て身の時に手を添えます。

(3) 急所二か所を同時に打つことができる

相手が横面を打ち込んだ時・肝臓と小手を同時に撃つ（表の太刀1、2）。

相手が上段の時：小手と横面を同時に撃つ（表の太刀2、3）
相手が横から胴を打ち込んだ時：小手と肝臓を同時に



写真 25. 反りを利用し、受ける・突くを同時に行う

撃つ（表の太刀4）

(4)刀身を二つに分けて攻防に使う

止むを得ず受ける場合…鏢競合いの如く鏢近くで受け、鋒で相手を突く。受けると同時に刀身の半分を攻撃に使う。

太刀の反り幅を利用する（押し斬り）

頸動脈を斬る際、反り幅を利用して刺し込む（図13左）。

彎曲を利用して甲冑の弱点を打つ

小手の内側（上から、下から）、腋の下から心臓、草摺りの合間から太腿の内側、草摺りの上部（腰）、冠の真ひさしの間、佩楯の横など、甲冑の弱点を彎曲を利用して撃つ。

刀法用語

現在の中国武術用語で説明します。漢字は一字で動作を示すので、非常に便利だからです。切るという言葉はほとんど使いません。

劈…断ち斬る…刀の鋒三寸を相手に食い込ませ、そのまま斬り下げる。中国では劈刀といえます。

斬…刃の上方半分をこすりつけるように押し斬る（または引き斬る）…香取では殆どが押し斬りです。相手との間合いが広い場合、とくに前方に踏みこむ押し切りは有効です。また太刀では引くと届かなくなり、斬る力が弱まります。

截…鋒三寸または刃全体で叩くように切る（表の太刀1、2）
刺…刀身を相手の体内に差し込む（腹突き、表の太刀3）。

窄（突）…鋒だけを急所に突き入れる…心臓、頸動脈、内小手の動脈。冠のひさしの下から額を突く。

型（連続技）

香取の技は連続しています。それを説明するために表の太刀4本目「霞（神集）の太刀」の一部を例示しておきます（図13右側写真）。

表之長刀の型は、表之太刀の型と同じ名前、同じ技です。ですから古代は、刀を長刀として使う事をいつも想定していたのではないかと思われます。蕨手刀や古太刀（太刀）もそうでしょう。相手の刀をひっかけ落とすために、中国兵器の戈、矛、戟の様に小刀を棹（長柄）に付けた可能性が

あります。

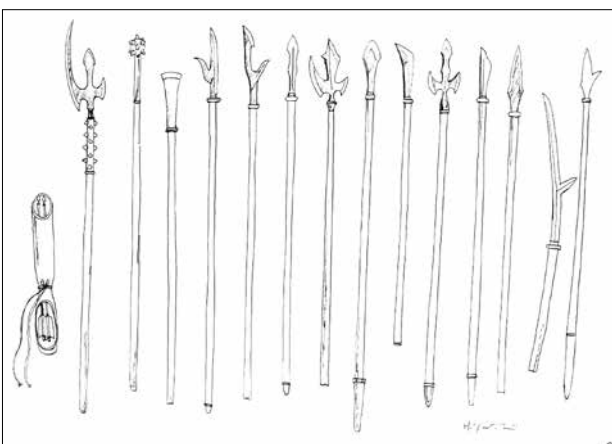


図12. 縁起絵巻に描かれている武器：画家谷合浩典氏が描き出しました。

アテルイが闘った頃は、その様な武器が多数考案されたと思います。図12は画家谷合浩典氏が縁起絵巻から拾い出した蝦夷の武器一覧です。因みに筆写が調べた「長刀」の刀（なた）は、アイヌ語のノタ（刃物）に由来していました。中国（語）にナタはありませんでした。

型は連続技で構成されている

攻撃

刃を傷めないように棟で引っ掛けるように受ける

棟受け

渦巻きで巻落とし
下から切り上げ

首を狙われたら、首を撃つ

刃筋を示す

抑えて首

太刀の反り幅を利用して首に擦り込む。押すだけで斬れる。

首受け

正面打ち
胴を撃つ

丹田を回転し、太刀を回して胴を斬る

鑢元で受ける

片手で闘う場合

刺して来たら上から受け流す(小手を斬る)

小手打ち

刃を上にして
鑢でうけ流し

踏み込んで首を撃つ。
馬上ならば馬の速力を使い、刃を返すだけ

相手が崩して胴を打って来ると
一歩退がって内小手を斬る。

すり足で相手が踏み込んで来たら、自殺行為となるように逃げずに一歩退がるだけ。間合いの妙をつかう。相手の剣は届かない。

図 1 3



写真 26. 国際交流の手段としてまじめな会員だけに指導。写真はブルガリア、スウェーデン、フィンランド、ハンガリーの会員同志が練習しているところです。弯刀術の香取を心から楽しんでいます。

あとがき（試合、段位制度が無い弯刀術の魅力）

以上、香取の弯刀術の一部を写真で紹介し、弯曲した理由を考察してきました。日本刀に類似した弯刀が世界中に存在する理由がお分かりいただけだと思います。ついでながら、弯刀術に興味を抱く人が世界中に存在していることも知って頂きたいのです。

筆者は三五年前にアメリカやヨーロッパで香取の指導を始めましたが、今では次の十七カ国50道場に増えました。アメリカ、カナダ、ロシア、フィンランド、スウェーデン、スペイン、ポルトガル、ハンガリー、ブルガリア、トルコ、ウクライナ、ポーランド、ギリシャ、韓国、マレーシア、シンガポール、フィリピンです。このほかにノルウェイ人、イラン人、インド人、ジャマイカ人、アフリカ人、オーストラリア人、エジプト人など数えきれませ

ん。

弯刀術は非常に難しいにもかかわらず、海外では真剣に取り組む人が非常に多く、どんどん増えていきます。その理由は、香取には試合が無い、段位制度が無い、落ち着いて生涯かけて修行出来るというメリットがあるからでしょう。つまり生涯学習なのです。筆者は宗教と政治から離れて指導しているのです、どの国の人も友人になることが出来ました。

しかし、一方で技と精神を正確に伝えるには、秘伝制度は必要と考えています。ビジネスとして宣伝して増やすと、それが暴力として使われてしまう恐れがあります。

弯刀術を一通りマスターし教師免許を得るには、少なくとも一〇年はかかります。その間に性格を見極めてから免許を允可します。筆者が発行した教師免許は、昨年一〇〇名を越えました。弯刀術の次世代への正確な伝承制度は、ほぼ出来つつあります。

香取神道流に入門した昭和50年代に、師から「日本刀に関する知識を持つことが香取の基本」といわれ、間宮光治先生、佐藤矩康両先生のお薦めもあつて舞草刀研究会に入会し勉強させていただきました。皆さんには本当に感謝しています。今後のご指導を御願ひして、脱稿とさせていただきます。

〈参考文献〉

- (注1) 石井昌国著『藏手刀』（雄山閣蔵版、昭和41年）
- (注2) 周緯著『中国兵器史稿』（新華書店、一九五七、北京）
- (注3) 景德鎮・宮窯（朝日新聞二〇一九年二月十一日号より転載）
- (注4) 朝鮮刀「御刀」（韓国中央博物館二〇一七年一〇月展示品、筆者撮影）
- (注5) コバルトを使用した陶器（台湾故宮博物院で筆者撮影）
- (注6) ロストフ・ドン博物館にて筆写撮影（Rostov Na Donu, Russia）